

各関係機関長 殿
病虫害防除員 殿

徳島県立農林水産総合技術支援センター
病虫害防除所長
(公印省略)

平成19年度農作物病虫害発生予察情報について

平成19年度農作物病虫害発生予報第9号を発表したので送付します。

平成19年度農作物病虫害発生予報第9号

平成19年10月31日
徳島県

I. 野菜

冬春トマト

疫病

1) 予報内容

発生程度は「少」、発生量は平年並(前年並)

2) 予報の根拠

(1) 10月後半の巡回調査では、発生を認めなかった(平年同時期は、発生圃場率が2.0%、発病度が0.1)。

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 窒素質肥料を過用すると茎葉が軟弱となり発生しやすくなるので、肥培管理に注意する。
- (2) 罹病葉は伝染源になるので、できるだけ早く摘み取って、ハウス外で処分する。
- (3) 病原菌は気孔から侵入するので、薬剤散布は気孔の多い葉の裏側を重点的に行なう。特に、下葉には丁寧に散布する。
- (4) 病原菌が侵入してからごく短期間で発病するので、発生を認めたら散布間隔を短縮して、集中的に薬剤散布を行なう。

オンシツコナジラミ

1) 予報内容

発生程度は「少」、発生量は平年並(前年並)

2) 予報の根拠

(1) 10月後半の巡回調査では、発生圃場率は50.0%、寄生葉率は3.8%で、ほぼ平年(44.2%、8.4%)並の発生であった。

3) 防除上注意すべき事項

(1) 多発すると防除が困難になるので初期防除に努める。薬液は葉裏にも十分に付着するように丁寧に散布する。

タバココナジラミ(バイオタイプB, バイオタイプQ)

1) 予報内容

発生程度は「中」、発生量は平年より多い(前年より多い)

2) 予報の根拠

(1)10月後半の巡回調査では、発生圃場率は75.0%、寄生葉率は8.8%で、平年(2.5%、0.1%)より発生が多く、バイオタイプQ発生圃場の存在も確認した。

3) 防除上注意すべき事項

- (1)コナジラミ類が発生している苗は使用しない。
- (2)圃場周辺の雑草は増殖源となるので、除草を徹底する。
- (3)施設開口部(出入り口、天窗、ハウスサイド)に0.4mm以下の防虫ネットを被覆し、昇温抑制のため循環扇を設置するとともに、紫外線カットフィルム(侵入防止)、黄色粘着紙(誘殺)、光反射マルチ(忌避)などの物理的防除法を活用する。
- (4)多発すると防除が困難になるので初期防除に努める。薬液は葉裏にも十分に付着するように丁寧に散布する。
- (5)バイオタイプQは、バイオタイプB(シルバーリーフコナジラミ)に比べ、ピリプロキシフェン剤(商品名:ラノー)、ネオニコチノイド系剤の一部(商品名:アドマイヤー、アクタラ、ダントツなど)、合成ピレスロイド系剤に対する感受性が低いことが報告されている。したがって、これらの薬剤による防除効果が低い場合は、他の薬剤に切り替える(有効な薬剤の種類については、平成18年12月20日付け平成18年度特殊報第1号を参照し、最新の登録内容を確認する)。
- (6)薬剤感受性の低下を回避するため、同一系統の薬剤の連用は避ける。
- (7)栽培終了後は成虫の施設外への分散を防ぐため、薬剤防除を行ったうえで株を切断し、施設を密閉して蒸し込み、虫を死滅させる。

冬春ナス

うどんこ病

1) 予報内容

発生程度は「少」、発生量は平年よりやや多い(前年より多い)

2) 予報の根拠

(1)10月後半の巡回調査では、発生圃場率は33.3%、発病葉率は9.8%で、平年(25.1%、2.5%)よりやや多めの発生であった。

3) 防除上注意すべき事項

- (1)発生が多くなってからでは防除が困難になるので、初期防除に努める。
- (2)罹病葉は早期に圃場外に持ち出し、病原菌密度の低下に努める。
- (3)耐性菌出現の恐れがあるので、同一系統薬剤の連用は避ける。

すすかび病

1) 予報内容

発生程度は「少」、発生量は平年並(前年よりやや少ない)

2) 予報の根拠

(1)10月後半の巡回調査では、発生を認めなかった(平年同時期は発生圃場率が7.3%、発病葉率が0.5%)。

3) 防除上注意すべき事項

- (1)罹病葉は伝染源になるので、できるだけ早く摘み取って、ハウス外で処分する。
- (2)発生が多くなると防除が困難になるので初期防除に努める。薬液は下葉の葉裏にも充分付着するように丁寧に散布する。
- (3)耐性菌出現の恐れがあるので、同一系統薬剤の連用は避ける。

アブラムシ類

1) 予報内容

発生程度は「少」、発生量は平年並(前年並)

2) 予報の根拠

(1)10月後半の巡回調査では、発生を認めなかった(平年同時期は寄生葉率が 3.7%, 発病度が 0.1)。

3)防除上注意すべき事項

(1)多発すると防除が困難になるので初期防除に努める。アブラムシ類は葉裏や芯芽に寄生しているので、薬液は葉裏にも充分付着するように丁寧に散布する。

オンシツコナジラミ

1)予報内容

発生程度は「中」、発生量は平年より多い(前年よりやや多い)

2)予報の根拠

(1)10月後半の巡回調査では、発生圃場率は83.3%, 寄生葉率は23.3%で、平年(35.4%, 3.5%)より多めの発生であった。

3)防除上注意すべき事項

(1)多発すると防除が困難になるので初期防除に努める。

ハダニ類

1)予報内容

発生程度は「少」、発生量は平年並(前年並)

2)予報の根拠

(1)10月後半の巡回調査では発生を認めなかった(平年同時期の発生圃場率は 4.1%, 寄生葉率は 0.2%)。

3)防除上注意すべき事項

(1)多発すると防除が困難になるので初期防除に努める。ハダニ類は葉裏に寄生しているので、薬液が葉裏にも充分付着するように丁寧に散布する。

ミナミキイロアザミウマ

1)予報内容

発生程度は「少～中」、発生量は平年よりやや多い(前年並)

2)予報の根拠

(1)10月後半の巡回調査では、発生圃場率は100%, 寄生葉率は 7.3%で、平年(41.9%, 8.6%)より発生面積が多かった。

3)防除上注意すべき事項

(1)多発すると防除が困難になるので初期防除に努める。

秋冬ダイコン

ハイマダラノメイガ

1)予報内容

発生程度は「少」、発生量は平年並(前年よりやや多い)

2)予報の根拠

(1)10月前半の巡回調査では、発生を認めなかった(平年同時期は発生圃場率が10.4%, 寄生株率が 0.9%)。

(2)10月26日発表の1ヶ月予報では、気温が高い確率は50%とされており、やや発生助長的気象条件である。

3)防除上注意すべき事項

(1)発生初期の薬剤防除に努める。

アブラナ科野菜共通

コナガ

1) 予報内容

発生程度は「少」、発生量は平年並(前年よりやや少ない)

2) 予報の根拠

(1) 10月後半のブロッコリー、カリフラワーの巡回調査では、発生を認めなかった(平年同時期は発生圃場率が21.4%、10株当たり寄生幼虫及び蛹数が0.3頭)。

(2) 10月26日発表の1ヶ月予報では、気温が高い確率は50%とされており、やや発生助長的気象条件である。

3) 防除上注意すべき事項

(1) 多発すると防除が困難になるので初期防除に努める。葉裏に生息しているので、薬液は葉裏にも充分付着するように丁寧に散布する。

(2) 同一系統薬剤の連用は薬剤抵抗性獲得の恐れがあるので避ける。

秋冬ネギ

さび病

1) 予報内容

発生程度は「少」、発生量は平年並(前年並)

2) 予報の根拠

(1) 10月後半の巡回調査では、発生を認めなかった(平年同時期の発生圃場率は5.6%、発病株率は0.3%)。

(2) 10月26日発表の1ヶ月予報では、気温が高い確率は50%とされており、やや発生助長的気象条件である。

3) 防除上注意すべき事項

(1) 多発すると防除効果が見られなくなるので、発病前から定期的に薬剤を散布して予防する。

(2) 肥切れすると発生が多くなるので、適切な肥培管理に努める。

アブラムシ類

1) 予報内容

発生程度は「少」、発生量は平年並(前年並)

2) 予報の根拠

(1) 10月後半の巡回調査では、発生を認めなかった(平年同時期も未発生)。

(2) 10月26日発表の1ヶ月予報では、気温が高い確率は50%とされており、やや発生助長的気象条件である。

3) 防除上注意すべき事項

(1) 多発すると防除が困難になるので初期防除に努める。

シロイチモジヨトウ

1) 予報内容

発生程度は「少」、発生量は平年並(前年並)

2) 予報の根拠

(1) 10月後半の巡回調査では、発生圃場率は12.5%、50株あたり寄生虫数は0.1頭で、平年(24.8%、0.8頭)並～やや少なめの発生であった。

(2) 10月26日発表の1ヶ月予報では、気温が高い確率は50%とされており、やや発生助長的気象条件である。

3) 防除上注意すべき事項

(1) 幼虫の齢期が進むと薬剤の効果が著しく低下するので、発生初期に徹底防除する。

(2) ヨトウコンーSによる交信攪乱効果は設置後3ヶ月程度で低下してくるので、早めに交換する。

ネギハモグリバエ

1) 予報内容

発生程度は「甚」、発生量は平年より多い(前年よりやや多い)

2) 予報の根拠

- (1)10月後半の巡回調査では、発生圃場率は100%、葉の被害度は41.9で、平年(69.9%、6.1)と比べて多めの発生であった。
- (2)10月26日発表の1ヶ月予報では、気温が高い確率は50%とされており、やや発生助長的気象条件である。

3) 防除上注意すべき事項

- (1)多発すると防除が困難になるので初期防除に努める。
- (2)被害葉は有力な発生源となるので、絶対に圃場周辺に野積み・放置せず、速やかに処分する。

冬レタス

シロイチモジヨトウ

1) 予報内容

発生程度は「少」、発生量は平年並(前年並～やや多い)

2) 予報の根拠

- (1)10月後半の巡回調査では、発生を認めなかった(平年同時期は、発生圃場率が5.6%、寄生株率が0.2%)。
- (2)10月26日発表の1ヶ月予報では、気温が高い確率は50%とされており、やや発生助長的気象条件である。

3) 防除上注意すべき事項

- (1)多発すると防除が困難になるので初期防除に努める。

冬春イチゴ

うどんこ病

1) 予報内容

発生程度は「少」、発生量は平年並(前年並)

2) 予報の根拠

- (1)10月後半の巡回調査では、発生を認めなかった(平年同時期の発生圃場率は6.8%、発病葉率は0.5%)。
- (2)ビニール被覆後は発病好適環境となるため、増加するものと予想される。

3) 防除上注意すべき事項

- (1)発生が多くなってからでは防除が困難になるので初期防除に努める。
- (2)罹病葉は伝染源になるので、見つけ次第圃場外に持ち出し、病原菌密度の低下に努める。
- (3)古葉を早めに除去し、葉裏に薬液が十分かかるように丁寧に散布する。
- (4)同一系統薬剤の連用は耐性菌出現の恐れがあるので避ける。

炭そ病

1) 予報内容

発生程度は「少」、発生量は平年並～やや多い(前年よりやや少ない)

2) 予報の根拠

- (1)10月の巡回調査では発生圃場率がやや高かった(前半:14.3%、後半:21.4%、平年は9.5%、12.8%)。
- (2)ビニール被覆後は発病好適環境となるため、増加するものと予想される。

3) 防除上注意すべき事項

- (1)発生が多くなってからでは防除が困難になるので初期防除に努める。
- (2)従来型炭そ病の場合は、萎凋症状が止まっているようでも、ビニール被覆後に枯死することが

多いので、罹病葉は見つけ次第除去し、苗があれば植えかえる。

- (3)葉枯性炭そ病の場合は、早目に病葉を除去し、アミスター20フロアブル等、効果が高い薬剤で集中的に防除を行なう。

アブラムシ類

1) 予報内容

発生程度は「少」、発生量は平年並(前年よりやや少ない)

2) 予報の根拠

- (1)10月後半の巡回調査では、発生圃場率は35.7%、寄生株率は3.7%で、ほぼ平年(28.6%、5.7%)並の発生であった。

3) 防除上注意すべき事項

- (1)多発すると防除が困難になるので初期防除に努める。アブラムシ類は葉裏や芯芽に寄生しているので、薬液は葉裏にも充分付着するように丁寧に散布する。

ハダニ類

1) 予報内容

発生程度は「少」、発生量は平年よりやや多い(前年より多い)

2) 予報の根拠

- (1)10月後半の巡回調査では、発生圃場率は64.3%、寄生葉率は4.5%で、平年(30.0%、5.8%)より発生面積がやや多かった。

3) 防除上注意すべき事項

- (1)多発すると防除が困難になるので初期防除に努める。ハダニ類は葉裏に寄生しているので、薬液が葉裏にも充分付着するように丁寧に散布する。
- (2)同一系統薬剤の連用は薬剤抵抗性獲得の恐れがあるので避ける。

野菜共通

オオタバコガ

1) 予報内容

発生程度は「少」、発生量は平年よりやや少ない(前年よりやや多い)

2) 予報の根拠

- (1)10月1～5半旬のフェロモントラップへの誘殺虫数(調査5圃場の平均)は7.8頭で、平年(69.6頭)に比べて少なかった。
- (2)10月26日発表の1ヶ月予報では、気温が高い確率は50%とされており、やや発生助長的気象条件である。

3) 防除上注意すべき事項

- (1)幼虫食入後は薬剤の効果がないので、結球野菜は結球直前までに、使用基準に基づき必ず薬剤防除を行なう。

II. その他

1. 薬剤の使用に当たっては、必ず農薬ラベル記載事項を遵守してください。

発生量の表示

発生程度：甚>多>中>少>無

発生量：多い>やや多い>並>やや少ない>少ない

テレホンサービス 0883 (26) 1199
ホームページ <http://www.green.pref.tokushima.jp/boujyosyo/>

病害虫の発生予報，発生状況，防除法等をお知らせしています。